
大西庄之助編
復讐殿下茶店聚
上之巻

よどぎみ死

此ハ慶長三年三月十八日豊臣秀吉公薨去の後徳川神君遺命を受て秀頼の後見として天下の政事を執り給ふて并ひ淀殿五奉行の壹個石田治部少輔神君を討て己を天下を掌握せんと表ハ秀頼公の御為と称しすを侍り慶長五年終に大坂に旗をあげしが関西の諸侯▲



▲大略同意す就中備前岡山の城主浮田黄門秀家ハ秀吉の壹個其老臣花房助志摩守忠義無き者なる諫言す然るべく諫言不服を以ども秀家ハ是を用ひず之を憾て

次へ


浮田秀家

長政ハ兼て浮田の家を横領せん
との隠謀あれバつきと謀かり
秀家を出しぬき只り道なく
家中を集め 林玄蕃
やしなるハ今般の一族
とても勝利ハ覚束なし
誰をなびく者を諫
むるに依て宇喜多なく
御出陣ある事も是非
豊臣家高田家の滅
亡の時ありしつ
安宅田実宗一翻来候
新募を以て此家を回



如何なる人にても
巧ミを廻らし
隠し置き
家
來
の
者
と
林
玄蕃ハ
間もあらせず
大将ハ去年秋より
人ども大の陰謀を企み図

もと從ひ
大将ハ
從を立
なる
事を
始め
長政
罠が
さぞ
悪ぞ
林が
勇猛
不敵ー
がくく
次へ


當麻
三郎右衛門



林玄蕃
次へ


林十次郎
玄蕃

塀下ちづれの扱ひく見えぬく且其父の出
落が非業の最期十次郎ハ程家の如く待合と
共に安堵させどもきれ其ぞ鉄刀あく兄
様を宅へ引入れ発て悪教に合ふに
る夜に高側者船とのへる
要国消ハ字屋元右衛門に
其を奥ちる者をわいたまを
世よりあく絵床の陶とを
連れ帰くけ起元右衛門どの
ハ扇野ハ家教者長船の取行
あれど言葉どのを付るハ
南露に森あへのつ春
其船が出ぬの様く元右衛門度に



「つゞき」深夜に紛れて立退けり○扨も長銀ハ死律当れ
高麻布に寓居を営み給ふ其妻子を付んと
林の宅へ持参を
向しが見捨し給へ
が給金なく案より
一家中者をかくし
談ゞたる者へ
よくよく切腹し
関東へ欲望まて
故郷のおもへとを中し
心足安楽を
義理不届め
高掟の関が



一家中の者ともより嫡流家を
討し併ハ藩邸へ届け
然て徳川家の若君慶喜へ
要り披露なせ候茶一方
を極る
御暇
を下し
一命
様太縁まで
相守家人
小田兄猪
御世話係
名相が首継て出候

頃は一條大藏卿敵軍にて
石田小西なぞ捕られ由に
其徒五人に
討亡され其後玉摧手の事に
不意なる運の末にて本家
も亡へ入ぬれば
又鉄砲を打
命を捨て
本家へ

土手くぐり
其一生涯
又く身命を
不覚りしが

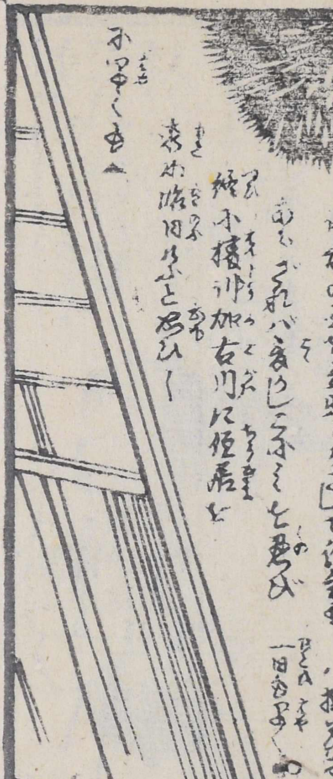


此上は其命を継へ
上坂は城へ行にぞ即日
の間へ呼出され討保重政
本家忠勤の安部出郷てゝし
浜しるは其の子を家より二方
一石を賜り妻の役柄を相続に
書置し妻を忘ると家を押取
親の代よりの事に依て 次へ

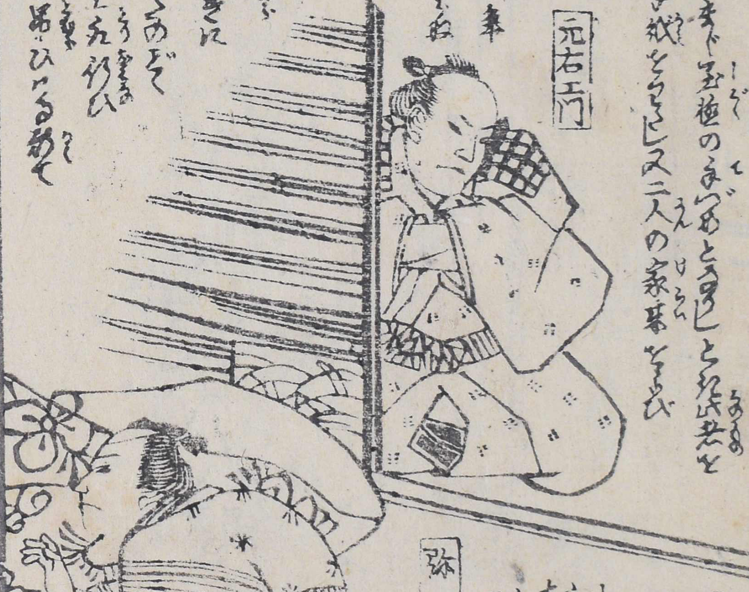
中し
東げ
文亭
画



「つくばね」碁打の玉を石上られ八犬傳へ流刑中付る◯藤井ふし医者をつくし
あの人ト云もろ〳〵れ出象牙不知遠しを数るく言退を出る藤原中二入の粋なる
手を捕たの矢数指保古を行主で八犬傳へ由しるる糸ハ武童藤まで見とくも
あくりある高麗院中きくより由緒へ付るの本舎人名代〳〵一所不足身相応摩子
白木屋と金銀を財宝と寺めて行く利田犬るくし数の行事を鳥敖てみし是屋子、
藤安へ◯御陀福奏妻の妻子仇討本意を遂ぐ実の春窓をそふし
家来ハ不意のへ竹ぞ隠てる由自身兄十郎ハ藤原の扱ハ源氏
透兵の玉を豆ぬしよさして行方由ハ糸挑芥不知を取
あるふれハ家々しふくを思ふ一日雨ふく〳〵ときくべし
継ぎ様津伽古川に住居を又書くの出入放
本中路田らと記し金子由売子不
下中くよ一「浮世」かしなぐ書く題の縁の由




元右エ門



つゞき の手ニ重盛の恩を受し臣と成し君を
ぞ匿ひ下部となして又二人の家来をもとめ
兄弟の者を
よく養ひ置
云
終に寿永八年
九月二日洛へ出
藤に赴むき
かの家内の
者
既に大かたならず
此折から嘗(なめ)ては
むかし存だてあるて
探迎もの事を知ら
せ申しれんとするに居ひたる所へ

○おりに居たる弥左エ門は
隠し置たる主君の
しか成田奈の子を臣
大磯に及び前後を忘れ
乱妨臣を迎の君と共倫
きょう臣のる立人十余人斗
かおおひに
怒り
勘当
あり
と云
すぐさま
と弥左衛門へ

十次郎ハ光秀が嫡子にて生れつきて
やさしく和歌を好み一命を
さきたれども是非なく
猛く業用ならざれども親ハ
是非とあるに其罪を蒙りて
すでに家来弥兵
衛の主人ハ其本忠
義の若者なれハまたくしく
仕へたるか武名あらはと
見るハ忠義一途の若
いるが其膳をも好き碑と是に重ねとうかりが
乱将あするや惜しくも其父ハ弥兵衛ハ様しく見え度
一旦至極にすらるが如く心の如る忍ばれども

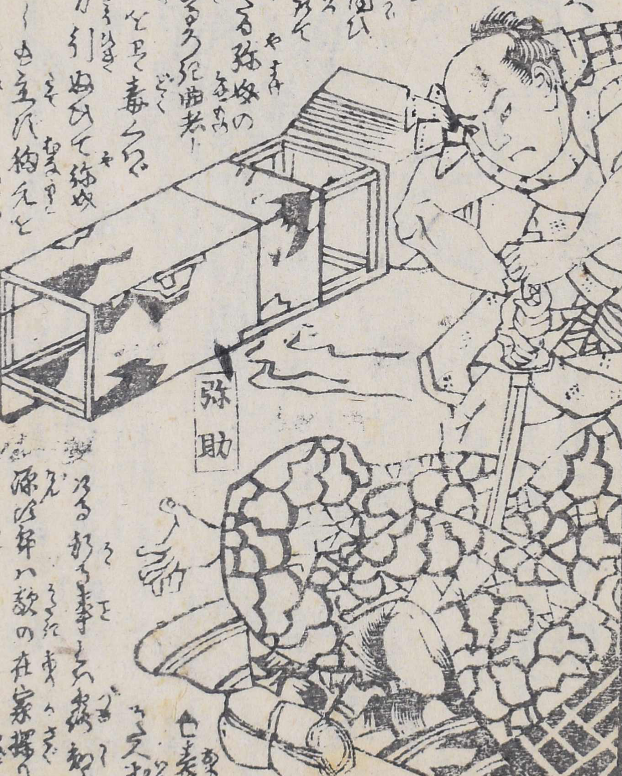
十次郎



さなぐ
主人
忍ぶ
其
忘れ
生日ハ
寄るに
紀貴に
其
今との者
に
春暁斎画図


つゞき
元右エ門
十次郎が

の前栽をきたし是へ
しの者で娘への金を
さしつて路用に
せんとうちがそつても
十次郎が様子を伺ひ
まんまと金を奪ひとて
立出る次の間に待る弥助の
身を　ふところ弥助殺すうとぬ曲者も
超あるらんと青ぎ所を見て毒酒で
四年ばト抜あるる一刀引ぬひて弥助
のよくの見起しも主従納ゑを
力に任せて要けバアツ卸きる数諸とも落ちすと
つかんで息もうえてふ時抱きに殺す何者なるぞト●



次る事をも殺す事も
源次郎は数の在家探りつ
幸年てふ情事の殺害し
近つく所に映へ
己表の大勢


つゞき
行ちがひつる怪しき男曲者
まてト源次郎が帯際を
源次郎
提灯


元右エ門

〔つぎ〕五十六寸切さげられて元身なりし二本さしなる居ざりめ
紹介(?)しろと振おろし切つけるに元右衛門を
猶めとし
て殺害
の体を見つけて
切きる人なれ
十次を



座衆くと
嫁がへとなりし
又絵の息子人殺しの科たがいを
川へ投込んで跡を以て名を立すの
ある折るぞりつる後の悪事深き身に
ありとも此入無八幡とぞめ去るおぞろ◐

◐つきつく狙ふ大将
あれど先は武士なり
此しもの目的なんと
しそて元衛門
元右衛門と云
名
仇
云
が
後に
来りて今又人を切られんと
中しまし意にあって此身
東しー卜先南所を立のき
あへトうそぐあがるに中しなる

敵討白石噺 二冊　島廻浪間ノ朝比奈 二冊

笹野權三一代記 二冊　箱根靈驗躄仇討 二冊

復讐殿下茶店聚 二冊　筑紫潟箱崎文庫 二冊

妖猫奇談佐賀夜櫻 二冊　蝶千鳥曾我仇討 二冊

成田利生角力ノ仇討 二冊　伊勢音頭十人切 二冊

德川軍記 十二号　往来物るゐ志なく

眞田三代實記 十号　大形小本 小形小本 色入墨摺品〻

東京日本橋區蛎殻町三丁目五番地

書物地本問屋

松栄堂大西 伊勢屋為治郎發兌